成形圖說

農事部 十三

和書門 類
二二五四九 號
一一七 函
一 架
三〇 冊

内閣文庫
和書 類
二二五四九 號
三〇 冊
一九 函
一九 架

内閣文庫
番號 和 22549
冊數 30（13）
函號 196 101

国立公文書館
National Archives of Japan

成形圖說巻之十三

目録

農器

耒耜　附 犂具

鍬杪

耙鋒

杈钁

鎒耰

扒欋

鎛鏟　附 鐙鋤

日本政府圖書

明治九年購求

釟钁　附 鐴鉤

耘杷　附 穀杷

長鑱　附 鴉背鋤

鎌鍥

鈇鉞

橋槁

拖杷

連枷

臼碓　附 陶臼

礱磨

箕籭　附 篩穀篣

颺扇

颺籃　附 千斛簁

成形圖説巻之十三

農事部 農器類

田乃器 書紀○和名鈔に農具といへり

農器 孔子家語銷劍戟為農器凡田器耕器農具耕具多の名ありて實おなし○宋仁宗實錄云呂夷簡通判濠通二州住河北按行水災還奏田器有算非所以重本請除之因詔天下農器皆免算

田器 禮記月令

蕃名

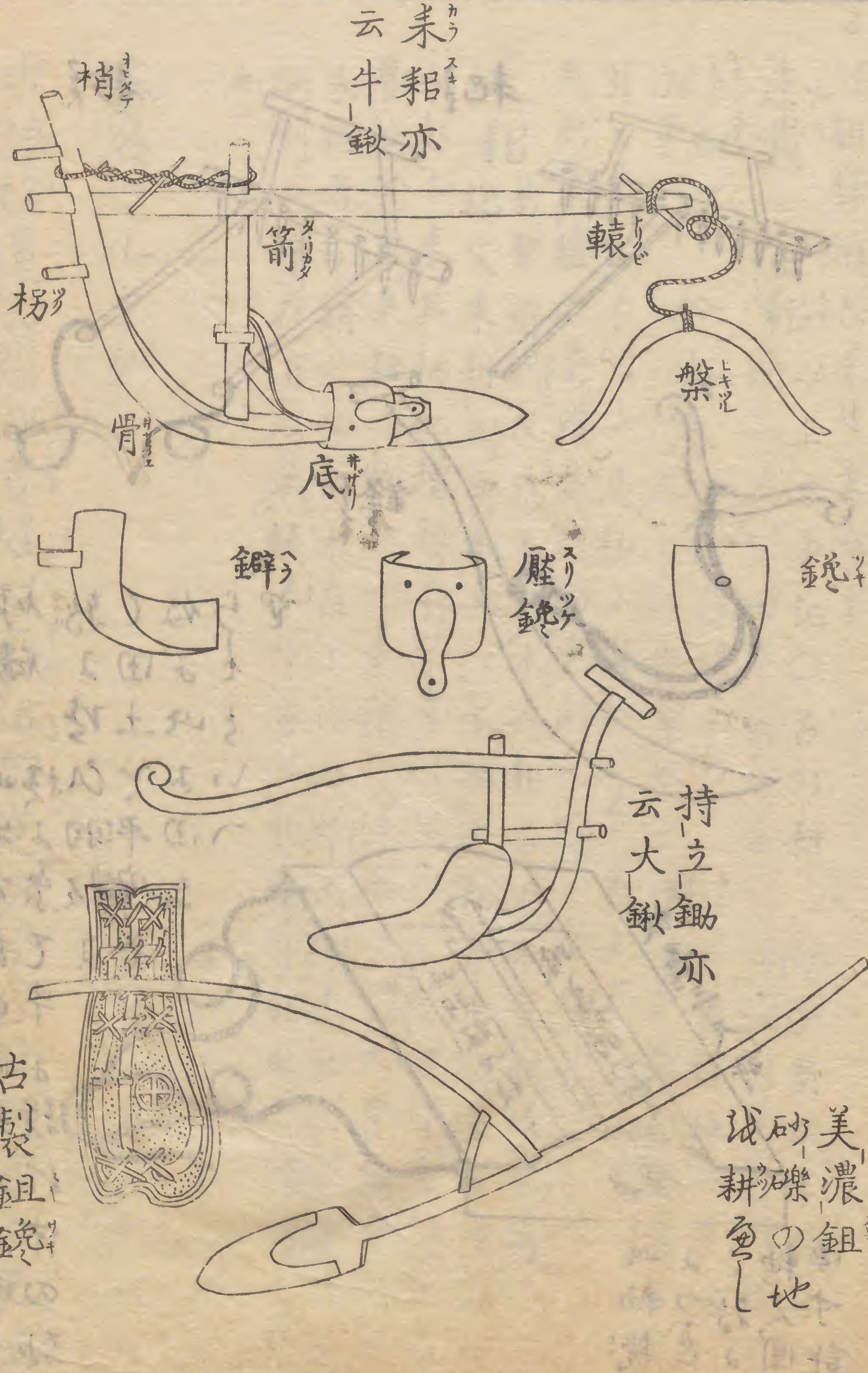
元正天皇詔曰朕巡京城遥望郊野芳春仲月草木滋榮東候始啟丁壯就隴畝之勉時雨漸澍有蟄蠢浴灌之悦何不流寛仁以安黎元布涼化而濟萬物乎宜給戸頭百姓種子各二斛布一常鍫一口令農蠶之家永無失業官學之徒專

忘私又養老五年詔諸國官長等に鍬各二十口を賜ひ農
耕を勸勵しめ給ふたとひ何ら農戸ハそれ〳〵田器牛馬を
持ざれバ耕穫ともに徒の力をつひやし耨耘の功をい
ちぢるしからぬものなれバ抑又百姓の田器を贍ふ
るたよりハ宜しく武夫の兵具を藏るがごとくならんか
しいかほどの好農具を持ありとも其技よりあつかひ
く耕し耘除の做工こまやかならざれバ剣鎗刺撃
の術を志らざるものゝ其の鋭色の巧拙を鑒賞し其鋭
鈍を試ろぶに異ならざれど天正の末豐太閤既に海内を
整理して百姓の刀銃等を停止せられしハ一揆を戒む

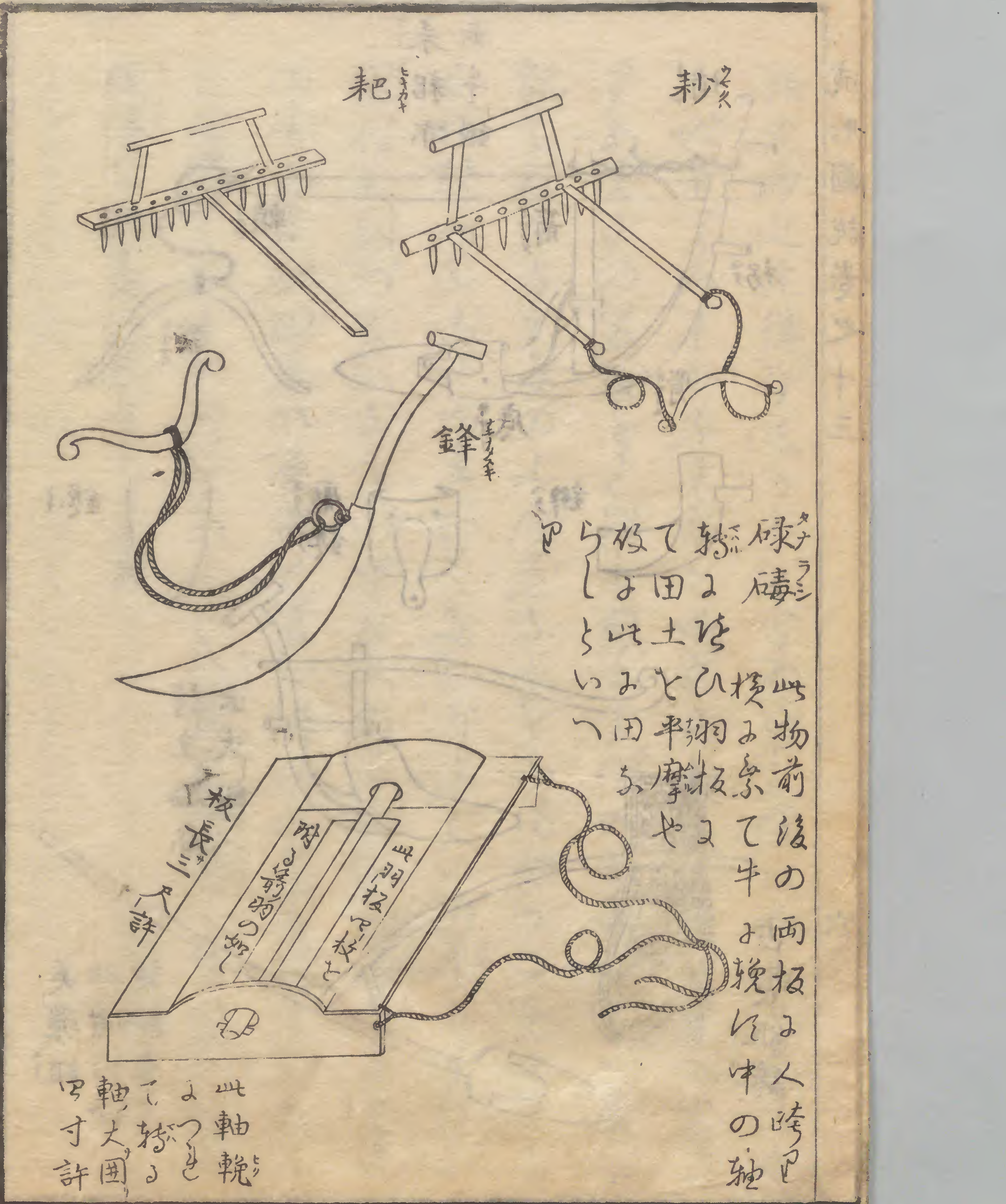
るの心得にて其條書の中に百姓の農具さへもち耕作
をなすにいたらしめずば子孫おのづから長久なるべきなど
と唐堯の寶劍を農器に用ゐられしごとくなるに於て農業に
心掛厚しとぞんぜられけり蓋唐斐度が鑄劍戟爲農器賦あり
凡五方の農圃一州の内にして其所用に各ひとしく其
名状ハ互に同しからざるものにて貴くなれバ又編の
圖寫するに及びがたし絶域においては耬車砘車の屬碌
碡礰礋の制作も極く其巧便なるを稱道すといへども
今此方の者我して俄に之を使ハしめば終日に碌〻と
して沖縄の人に雙刀を佩せたらんがごとく勞れて胃喘

くに堪さらしむ然ども心を実に用ふる者あらバ農家の
小補ともならんかし况や民事ハ常に遑なきが若しく
力を役るゝは苦しまば凡耕地の法ハ犂を通はせしとこ
ろび耖が用るもの二たび耙を糞ふまでまくてふたゝび
し門始て稲田平に泥壌熟あるの全功が得るにも遠ら
ざるに農の事常に煩苛に支られて耕耘数編うしむ
其新秧を抜挿ばく且ハ其穫収搗治など常に附ふ追
候に應さるがゆゑ動もすれバ火水雨暘の和気を失ふの
憂あり是故に養老の帝寛仁を流て萬物を撫ふとの先
衣糧を先にして饑寒の苦を救ひ因て埜が併せ務ふに

むねとせし嗚呼我　先王黎元を安ずるの道一にかくの如
くにして囹空の隆なるの沸まつりだにもゆるさせたまふ
なるべし因に朝廷の詔曰今者有司奏言諸國罪人惣
四十二人准法並當流以上者毎聞此奏朕甚愍之宜所奏
罪人並從坐者咸皆放免勿案撿焉　日本國中の罪囚僅
に四十人餘をもて天子の叡慮が惱ませたまふことあると
見て萬方有辜在予一人此ありさまを想像し奉るべきなり
かくよりは南史云宋高宗微時躬耕及受命耨耜之具頗
存命藏之以留于後文帝幸舊宮見而色慙近侍進曰大舜
躬耕歴山伯禹親事水土陛下不覩遺物何以知稼穡之艱



難先帝之至徳乎と志るるに今わざし國八人くさあしく
土地をよろしからざるがゆゑにあまさのとし一言に
又あまさの器械をよく耕しぬるにぞあれあるとも文に
記しぬるよくこその上乃器なども此海やうにとらし
くに就てたふ何まで近かく専せりしといひ草をうらに
惑はし詞づくひあんたいづれふの上に何の益なきのぞで
かしあれバ田畜の商當を擇て耕作の業猶精しく論ん
と器さむとのはよろしく徑爲く從節して沒掾撟の
成績をや要作る急しと云



須伎　書紀耜の字を訓じゑ
鉏鏝鍬鍤などを書すゐも
志貴
金耜　以上古事記○古の耜　柄耜　新撰字鏡犂也
或は木を用ふるに云　訓ぜり○内膳式
辛鉏と　土を起すより
於古志　名とされ即犂也
牛鍬　東鑑地名にいへ
即今山陽道にて
犂を牛鍬とはる馮鍬に對へいふる名にて
其形耒轅の前後長短の定あるのみなり

耒耜　易繫辭斵木為耒揉木為耜古用木金耜以金為之○
説文耒耕田曲木也从木推手耜耒也○孟子注耜所
以起土耒其柄也増韻耒耑又曰耜○
犂　食貨志輓犂易
農政全書耒耜二物而一事猶杵臼也
六全謝疊山云
耒耜者今謂之犂曲木在上俗名犂衡即耒也
鈴鐯　説文
劉削二片在下以承鍬二片俗呼犂壁即耜也
大犂
也

蕃名プルウグ
古語拾遺曰齋部官掘以齋鉏而造伊勢宮及大嘗由紀主

基宮盖上世の時鍬てふものゝ田を耕し土を起すものゝば
かりにあらず須凡ハ去職掘地の器なれバその名須伎と
いひしなり又嘗會の時由紀主基の田といふあり由紀
ハ斎忌なり主基ハ濯にて並に清潔の辞なれ又古事記
雄略の大御歌にも記たるとなんいへる故号其岡謂
金鉏岡也とも見えたるハ土を撈ひ上るの具なりといふ
なり書紀にハ御田鍬てふ人名あり又送飯といひなどて
くと新字鏡には耜をいふすくとよみ凡物を取上るに須
久比のことありゆゑに帶をもけるといひ或ハ魚をとる網
を結紙を抄などの道物を持ひして取上ぐるにいふ抄葉

子に掘りしを后萩もしきなどを爲てえつるに長柄とゝ
るとの鍬などひきさげてしづかにならていぬるこ
そわびしかれどかりけむ孟太古の耜ハ或金或ハ木な
るらん木の柄を施しつ柄耜の名ハいでまれなりとなん
えうらも輕のかまハ後にハ韓にならひしにやされど
神代の時より手もて田を耕しものありしにハあらぬ
美濃の耜てふもののなかくまで或ハ耜の柄を曲て牽
せしなるらん西土までもむかしハ木を曲尖らして耒耜
作るとも又後漢書には九真の俗牛耕を知らざるよし載
せられたれど西土にも牛にかゝるしハ後のわざなるなり

金布久志　端 以上和名鈔　柄耜乃端　耜端 此ものゝ中にも少し高き所あり
長八寸八分許　闊五寸八分許
鑱 陸龜蒙耒耜經治金而為之者曰鑱起其墢者也　銕犂鑱尖 本艸
蕃名 子ップエイスル
箆 新撰字鏡　柄耜乃縁 訓蒙圖彙○箆長一尺許闊七寸八分許端箆ニハ皆銕もて造る○内膳式
曰辛鉏閇良二枚鋒四枚随損請
鐴 和名鈔引唐韻犂耳也亦作壁○農政全書覆其墢者壁
也其形不一耕水田曰瓦繳曰高脚耕陸田曰鏡面曰碗
口随地所宜制也
蕃名
居去　牀 以上和名鈔

耒底 和名鈔　犂底 農政全書
蕃名
摺附 これのうらハ底板の磨きれざるやうに又銕を蔽ふものなり
壢鑱 農政全書
蕃名コウトルエイスル
居去乃柄 和名鈔
耒骨 漢語鈔　策額 農政全書
蕃名
絡梍形 和名鈔 箆金と云くはへのなり　多々良
耒箭 漢語鈔　犂箭 農政全書

番名
取首（トリクヒ）和名鈔　禰利 訓蒙圖彙　長柄（ナガエ）
耒轅 漢語鈔　犂轅 農政全書
番名
追立（オヒタテ）訓蒙圖彙
耒梢 漢語鈔　犂梢 農政全書
番名
引鉤（ヒキツル）俗音備年頭絹　尻懸（シリカセ）和爾雅
耕槃 農政全書 駕犂具也與鞅相為本末
○耒耜經 横於犂轅之前末曰槃
番名

耜乃柄（スキノヘ）延喜式
犂轡 犂彎 以上鄙諺正韻　犂柄 過庭録
番名
凡犂に打延（ハヘ）持鏟（モチヘラ）の二絆（フタツ）あり打延ハ底板より梢（トモ）を諸く梢の本末に片橛（ツノ）各一ツ出し左手に本の橛を執り右手に末の橛を執て耕すなり罔（ア）打延ハ只浮く土を起して深浅（サササ）を自由にすべし○持鏟（モチヘラ）一名ハ持返（モチカヘシ）是鏟（ヘラ）の本より梢（トモ）を諸て梢の端に横木を加へ両手にてこれを押（オサヘ）挽（ヒカ）ゆるほどよく深く耕むと欲にハ重（オモフ）くつよく押へ浅くせんとするにハ弱く押ふなり此浅深に熟（ツレ）て自由をを通し凡田土

国立公文書館 National Archives of Japan

を起墢すと浅深の交錯なく數を宜く得れ延犂ハ以一也
うなく鋤しとより行つらぬ重し持鑱犂ハ手熟者なら
ざれバ扱持使りとし凡犂なく耕すハ十倍人の力を
代と云是牛一疋ハ人の八九にあたれバ行へるなるべし
又耕に太巧拙の脇溝あるにより書せし墢のよく
反覆ると上よりのまゝを凡人はいまに及ぞ牛馬共に
盡日泥中に入て輓行る時ハ甚羸て後ハ脚を引挙がたく
くなれる也〇近江美濃等の水田ハ深淖ゆゑ牛耕を用
ひがたく人各一耜を乗て田を耕ヱも大なるこの故大
鋤といひ小をば小鋤と称へヱ字法主多く馬よりて土を

発し田を耕すら馬牛の農事における尤なしといふべし

久波 古事記

鍫 音慄○漢溝洫志 臿 亦作鍬鍤○農政全書古謂臿今謂鍬一器二名宜通用蓋今の俗をすきといひふぐごとし 方言燕之東北朝鮮洌水之間謂之𣃆宋魏之間謂之鏵或謂鍏江淮南楚之間謂之臿趙魏之間謂之喿皆謂鍬也

鋤 音組集韻鉏與鋤同故鉏鋙亦作鋤鋙字彙鉏立薅所用也是今の立鋤なり○左傳註耨鋤也

鎡基 孟子○史記作鎡基基亦作錤字典鉏也

銕鏵 本艸

蕃名ガラアフ

久波ハは喰歯といふごとし其首の曲て利く地を斫ば喰いれるがごとくなるより名づけしとぞ凡鋤の

端尖なるを鐃先といへる方あるを又筒先ともいふ按に
和名鈔には鍫を久波と訓し字鏡には鏵ハ鍫也須伎と訓され
ればいにしへハ須伎久波通していひしなとぞの套語
のおもむき漢土にても古ハ用ひられ今ハ鍬といふと有
て後ハ分して耕にものを按ずるに鍬をもて土塊
をも鋤ともいふなるべし舊事玄義曰男弓弭之物忌
鍬忌鋤類是也なども志るしたれば古は鋤鍬などに調賦
にも充しなるべく今にも畿内神祠に鋤鍬を納めまつりしもの
猶遺れるもあり尾張風土記海部郡大井田郷出年貢籠鋤鍬
鐏等民用繁又むかし鍬簽とて鍬をいふもの式あり今に

も鄙の農戸が用ひたりしとあり大神宮式凡操營神田鉏
鍫柄者毎年二月先祭山口及木本然後採之 大神宮鍬
山の神事の事と雜例集に載られ 元禄の頃にも大神宮神田の神事に用ひ
し鍬にて造られとゑみし事など有り 鍫形 按に神名式尾張國諸鍬諸鑺等の
神社あり今と異なるハ鉏一を二人して一ハ押へ一ハ
引つゝ耕せしは是諸鍬にてもなのまて古の遺法なるへし
周禮注古者耜一金兩人併發之なと論語耦而耕などあ
れバ和漢ともにいかにへのわざは一揆にや又蝦夷に
鍬先てふ物あり極て大きくいかにへ諸耜の屬にて先
王夷人へ農を勸め為に與へし所の鍬にや云一説に此

鍬先ハ老人極て重き寶として病る时ハ枕神ニ立て災
を禳ふ抽あり慈姑の葉乃形ある者ハ冑の鍬形をか
かげられるものにていふなりへハ雲寶をかせしるのはか又
罠東ニて牛耕を用ゐも其民水田を耕すハ鍬ニ畚を結
ひ前て兵水を搏ち時泥の激て臥を混ぜさるニ備ふる
所ハ淮南子ニ謂禹之時天下大水禹執畚鍤以為民先 方言沅湘
之間鍤謂之畚 畚鍤をおもひあはすべし

馬鍬 延喜式
馬齒 辨色立成
毛宇賀

耖 音抄 三才圖會○農政全書
耖と耙と分て二物とす

蕃名

此その馬ニ繋て田を作る具なれバ宇麻久波とはいふ
なり馬歯は形ニ象る或ハ即馬鍬の略なり今猶麻久波
麻牟具波など呼ぶかさし凡ソ三番耕起しの时田中ニ鞋
を踏入つゝ水を掛灌けて馬ニ此を輓せて田土の塊を碎
破て泥濘と一面ニ熟均なり馬ハ終日泥濘の中を行也
されバ疲困甚しき脚冷汗出滞る也急此をも驚せぬる时
ハ早く引して四を取り息め安ミ使ひ労ざるやうに
を第一とぞ○凡耖又人馬水陸此ニ通し用う漢ニて

は犂の後耙を用ゐ耙の後耖を用ゐ又碌碡を用ゆ

疌加伎 定家假字遣

疌佐良衣　輓把

耙音埧亦作䎱爬把篇海犂属○和名鈔引唐韻耙作田具

耙也○説文平田器○三才圖會列鑿方竅以齒為節畦畛

之間捜剔塊壞○農政全書宋魏之間呼為渠挐又謂渠疎

○陸亀蒙云凡排而後有把今日只知犂深為功不知耙細

為全功蓋耙徧数惟多為熟熟則　鐵齒鎘鎂 齊民要術

上有油土四指可没鶏卵為得　人字

耙方耙　钂器以上農政全書宋魏之

間呼為渠挐又謂渠疎

蕃名

此外の延喜内膳式等に陸田を耕にて把犂といふあり

無なり用て馬耕に代ふ無し水田のごとき耖把いまだ

編からざる或ハ水牛入がたき所傍因の面町挟なるなど一

人輓き一人之を按田土を疏通するあり又陸田にて一人

部行して把ふるく杷盪するものあり　漢の人字耙ハ人を上に載て牽るもあり

按に疌かきといふ成さるへともの名田土を把盪

深田の用ハ全ら同しく此定ハ木柄し索緒との名なる

て其名を異にせるのミ

長刀鉏 亦長刀鍬ともいふ長刀ハ長き刀の器なると長剣の名にまきれしなる雉刀と書たるもあり

小柄鉏

鋒 齊民要術○農政全書鋒古農器也其金比犂鑱小而加鋭其柄如耒首如刃鋒故名鋒取其銛利也地若堅垎鋒而後耕牛乃省力又不乏刃農書云無鋒而耕曰耩既鋒矣固不必耩蓋鋒與耩相類今耩多用岐頭若易鋒為耩亦可代也近世農家不識此器亦不知名茲特録其功用知為不可廢也

蕃名

此ものは新開の平地と牛馬に服控せて草木芟薙し跡の乱根を截断に用ゆる所なり其形眉尖刀に似て其脊の方に鋒刃とつけ柄ハ耒の如くしゆたかに環を着耕索を貫し牛槃に繋なるをもて其柄の端へ横股を施し此を以て按へ畜の力をもて挽行るなり其土塊或は鋤楼荊棘の荄と切通し次もの利劍毛を吹の快に比況し かくして後犂耖通便によらさるへ擲るときは大に人畜の労を省き敏に墾闢の功を遂るなり西藩嘗此ものを試用ひて其好畝の宜きとなせしとのあるよし其用を按に粗土の鋒耩なるへきものそれの制に符なり

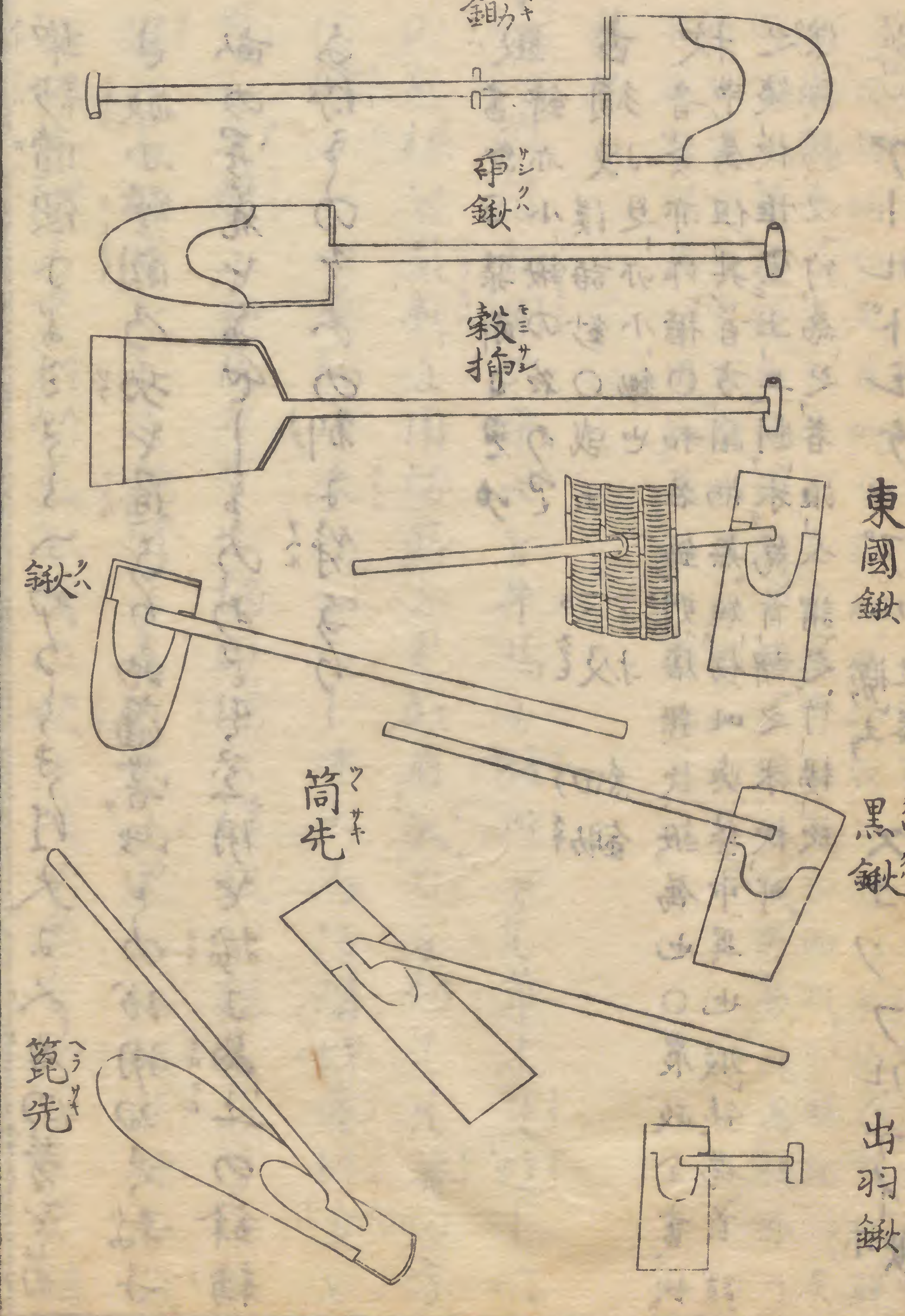
小鍬 書紀○集解に見ゆ

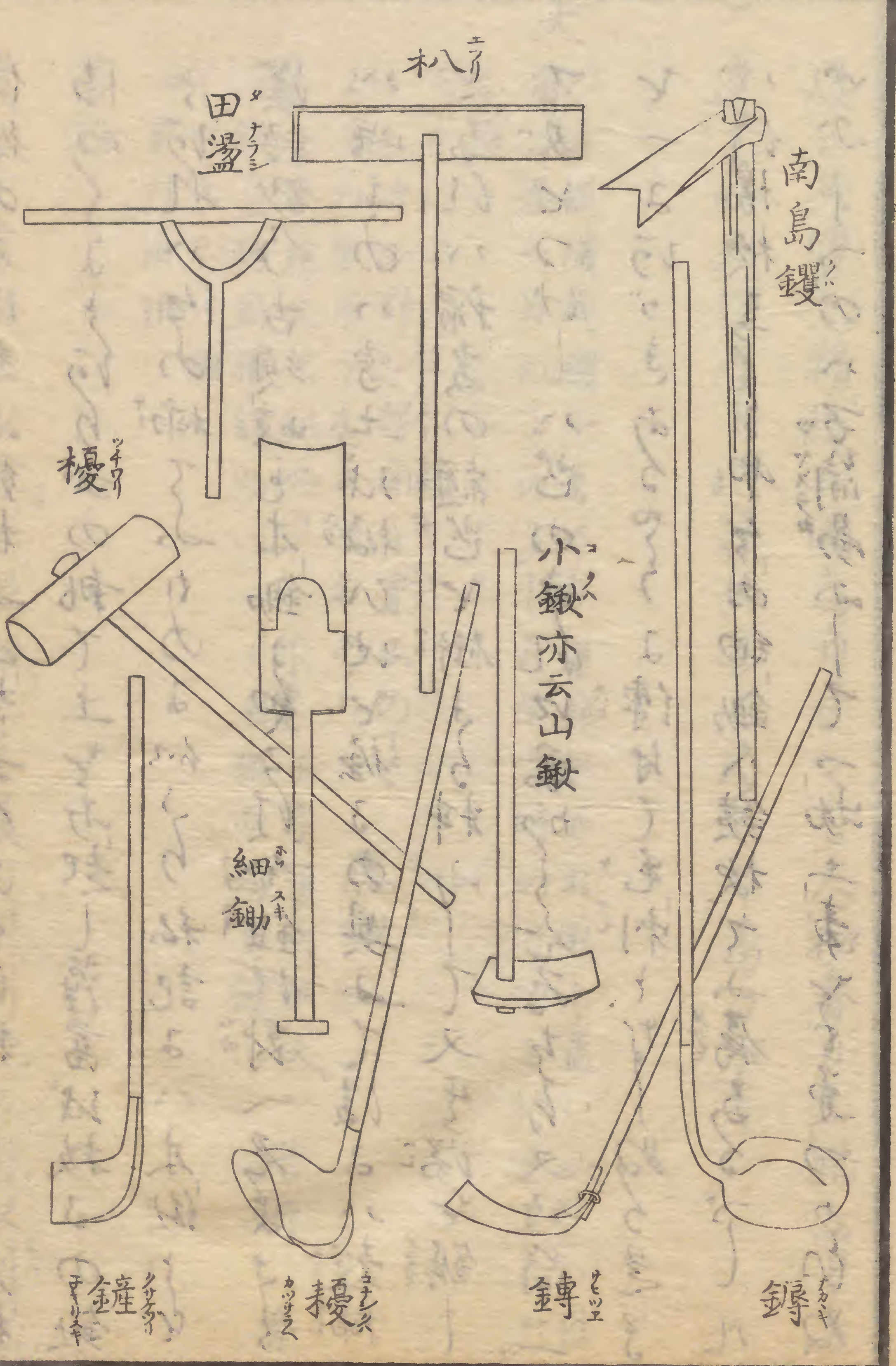
鏄 亦小鍬の名あり

古須岐 漢語鈔○或云 小扱 細鋤 是亦小鍬也

杴 音蘝亦作枚○和名鈔引唐韻杴鍬属也○農政全書杴臿属但其首方闊柄無短拐此與鏊臿異也鍬鍬為首謂之鍬杴惟宜土工剡木為首謂之木杴可橡穀物以竹為之者淮人謂之竹揚杴

蕃名 アールドシケップル 撥土之器 スコップ フルチイ 小鍬


鉏
帀鍬
穀揃
東國鍬
鍬
筒先
黒鍬
篦先
出羽鍬


朳
田盪
南島钁
櫌
小鍬亦云山鍬
細鉏
鏟
耰
鎛
鋤

仁德の大御歌に継根よ山背女(メ)乃木くは持(モチ)うちし大根
ちわくまと河り女の執て土を掘起し蘿蔔を抜るの鍬
となれバ今の插(サミ)てふものに似たり私記にハ木鍬とも
漢語鈔乃古須岐とも木鋤ともやらば金鉏(カナスキ)に對(ムカ)へるよさう
バ此もの八專土を掘(スリ)ひ地を掻るの具にて後にハ穀播(モミマキ)
となれバ稲麦の穎芒(ノギゲ)を衝(ツキ)する料にして又毛端(ハシ)を鋸(ノコギリ)し
て刃とつけしハ芒のきれはなれしめんがためなり又竹筒三(ミツ)
を一つに河ぎあるやうに傳(ユヒ)付て毛刺(ケサシ)となしぬる是等
ハ竹揚枚などまやくの細鋤ハ鍬枚にて属(タグヒ)なるべし凡
いにしへのハ質(ツヤ)簡易(スラカ)にして一物二事をも兼つらひぬ

殊に其質も精緻牢固なりきとも大和春日三輪などに
遺れる太古の器具などを見てもしるべし

大鍬(クハ)ハ貞觀儀式钁とよめり漢語鈔にもおなじ蓋いにしへは二器一名のもの多し或ハ是當時の俗字に據まると云ふ至りらむぞ

山鍬ハ本山野を墾開(ヒラキ)に專(モツパ)らものに用ふるゆゑに此名あり

黒鍬(クロクハ)

钁 音矍 說文大鉏也○ 鐯 音灼 爾雅钁也

阿鐃 正字通阿訓大 譌而爲鳥鑽

錯斫 魯

斫 以上三才圖會引爾雅

蕃名

農政全書钁主以除物根株也蓋農家開闢地土用以劚荒

凡田間山野之間用之者又有闊狹大小之分總名曰钁按其圖を見る所ハ今の所謂山鍬なり

中爬 亦中挽とも云

前把 和爾雅

鎒 音耨今作耨農政全書○爾雅斪斸謂之定廣雅定謂之耨○孟子易耨○淮南子治國者若鎒田去害苗者而已○字詁耨頭長六寸柄長六尺以芸田也○左傳註耨鋤也但説文穮耕禾間といへるを中把のわざにはいへるや

蕃名

凡耕と加幾をとつけは要に深田の代に用ひてあり

ともあるも耕しておれしきがおとし此らの裏ハ

亀の甲のおと中窪くうしらへ粟麦などの畦隴を挽て卻行すれバ壌ハ随ひ左右へ分まておのづと苗根に耔など故農圃陸田を培壅るの要器とせり

古奈志鍬 土を和熟するをこなすといふより出しなるべし

勝把 加賀鍬

耰 音憂説文摩田器○論語註耰覆種也○莊子註耰鋤也○淮南子耒耜耰鋤○史記耕之耰之鉏之耨之

蕃名

按農政全書耰鋤の圖あり云耰為鉏柄也未詳ならざる小似たり又云北方陸田率皆用耰鉏江淮間但用直項鋤

頭又雖鋤也其用如劚是名钁鉏とありされバ耰鉏ハ
北方のよのにて钁鉏と一物なるべし

衣布利 漢語鈔

古與世ふるゑ把寄の約 田奈良志 多識編

朳音八或作𢬍杷和名鈔引郭璞方言注杷之無
齒者為朳○三才圖會所以平土壤聚穀實也

凡水田渥漉精熟然後踏糞入泥盪平田面乃可
撒種此亦田盪之用也是亦碌碡と同功なり

田盪 農書

蕃名コロップル

按ずるに柄簀なるもの西州簀と大利といふ土の地或ハ糞の
具なる塵を捲入るゝもと篭のごとくなし柄をつけたる

も此名あり又溼田なとの耖を鉏とよぶごとくよまさるあ
所を見きて杷まぜ泥を盪し耕よらぬるべし凡ハ田の
面を盪平に用ゐ又ちゝ長柄にそのハ土塊把裂なとにつか
ふ也

土破 和爾雅

横楑 眠寤集

櫌音憂字彙

田打槌 多識編

打塊槌 木斫 塯槌

田槌 俗語度牟知 田槌の訛也

以上三才圖會 以平田疇擊塊壤可

蕃名ビユークハアムル

按ずるに是のあるハ堅塔を碎きあるハ藥場堆なとならす等に用

ゐるものなり又稲穂を捋落し或は芒毛をおとすに用ゐる但
のものを使へども常の扱に比すれば横に捗出し熟
のごときは能利迂闊にして扱を用ゐる扱ゐ不便にして直
に斧を使ひ棒を用ゐるがごとき善人智の日に敏捷に揃
なるなどかくのごとく巧
却て損壊もする事あるべし

鉏杖 漢語鈔○天武紀に小子部連鉏鉤てふ人あり鉏をさ
佐比と訓れば鉏を亦佐比と呼びしならんと云へり

草切鉏 多識編

新鉏 和漢三才圖會

草取鎌 其形異なりといへども本鎛の遺制なるべし

小鍬 訓蒙圖彙

馬耳鍬 農業全書是ハ麦の根に土かふ具其歯の馬の耳なるより挟きなり

鏄 音博 和名鈔引國語註鉏屬也 釋名迫地去草○詩傳鏄鎛也

蕃名

狭田の草去具なり書紀に韓鉏之剣とあり古事記傳に佐比は物を截断貌と云る言にて須加比の切る也又古へ須伎を延て須加比と云るが此佐比の本言の須加比と同き故に通はし借るにや古事記に曰解所佩之紐小刀著其頸其鰐者於今謂佐比持神とあれば刀剣の小きものをも鉏といひしならば鉏杖ハ杖の端に鉏を著たるの名にて其は竹藪等を薙きるの山拂なるべし 一説には津ハ助語鉏津柄なり積玉全書鋤柄云 一説には鏄ハ今俗に小鉏といふにて小サ柄の謂と釋なり空穂物語にさふらひの人そもちつけつくるらておとくくせしあるてくれのあらしさきてさいつゐつきてとありさいつゐハ小き杖とぞ聞ゆれども猶

けつらとあれバ是を鑄るや按に大神宮式に金銅鑄
二枝莖長各九寸三分とあれどこは農器にハあらず
輪徑一寸一分

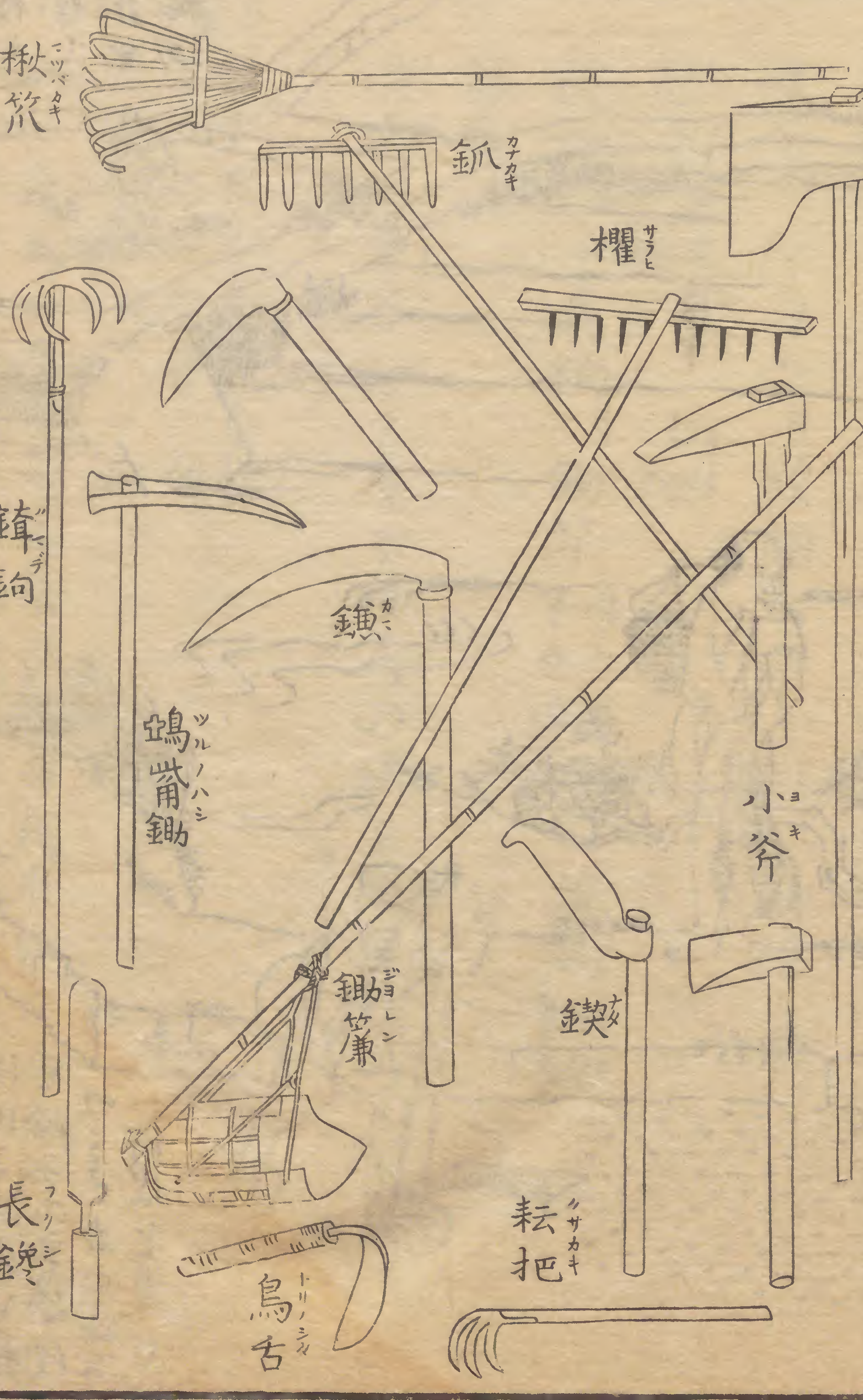
草削 多識編
韓鍬 和訓栞 根切鋤 江戸
鏟 字彙作剗 三才圖會 兩手持之但用前進
攙之剗去壟草就覆其根溝田者皆用之
鍬非鍬殆與鏟同纂文曰養苗之道鋤不如耨
柄長二尺又廣二寸以剗地除草此鏟之體用即與錢同
錢 農政全書
錢其制似
耨不如鏟 鏟
剗鍬 全浙兵製
蕃名
鐙鍬 形ち象るあり

鐙鋤 三才圖會剗草具也柄長四尺
○按漢の鐙ハ壺のごとし

金鉤
櫛代 以上漢語 麻年乃布 越中 鍬 石田などの鎚の事に
鋤簾 鈔 溝の淤泥を浚へ 砂さしへる地に用う
掬ひ取るものなり
鈲 音柏 和名鈔引 鋏搭 鋏把 以上三才圖會 ○農政全書
切韻 鉤鈲也 書南方農家或乏牛犂
此以代耕墾取其疏利仍就鐝鏄
塊壞又折木爲器ともいへり
蕃名ハアク 鈲 モッドルシケップ 鋤簾
金鉤ハ鐵にて造る爪のごとくなればかなかきといひ
又櫛代ハ馬の梳に似たるより名ありしなるべし又鍬

代せともいつり万葉集調らしろつくたぶしのさまに
いふもかゝる大宮人也玉藻かるらん按ニ宋の張擇端ゟ
画く汴京清明上河圖に農夫の田を耕の図ありこの金鉤
を持てる畫汴州の土堅塊なとをはらのぞの用しあへん

佐良比し新撰字鏡○俗言佐良衣凡物を復し清く
爬攫がごらき皆さらへといふい濃多し
木間佐良衣俗駒撫ふとも書なり 木乃葉爬 松葉爬
擢音勑和名鈔引方言云齊魯謂四齒把為擢○品字箋範ハ五齒把以之取草 楸箢玉堂雜字破竹為齒
以取松楸 竹把三才圖會 五齒爬圖書編
蕃名ホーイガフフル亦ホルク



凡陸田の草刈耘にハ杷爪或ハ肥壅の畔壊かきよするに
此ものをつかふ顔昭云さらひハ掃除なり

熊手 手鈎 亦言熊 土爬

鋳鈎 集韻 長鈎 鈎竿 竿以上通鑑或作干 撓鈎 海防纂要

蕃名

溝渠の蔕芥とつまりたるの流を疏通すの具なり

草把 草取ともいふ手形大小一ならず

草取 以上和訓栞

耘杷 農政全書以木為柄以鐵為齒用耘稲禾又云耘盪形如木屐而實長尺餘闊二三寸底列短釘二十餘枚簨

其上ニ以貫竹柄ヲ耘田ヲ之際農人執之推盪禾壠間草泥ヲ使之溷溺則既ニ勝把鉤ニ又代手足ニ水田有手耘足耘

𣫍佐良衣 多識編　古通波 和漢三才圖會 蓋𣫍把の音なり

𣫍把 農政全書 用撒曬穀ヲ　透齒把 同上

蕃名ハアリ

布久志 萬葉集○和名鈔 加奈布久志

金箆（カナヘラ）　鳥乃舌（トリノシタ） 布久志と曲たるに形よく似たるゆゑ　艸取鎌（クサトリカマ） 和爾雅

長鑱 杜甫寓同谷縣歌○集韻鑱土具 蓋犂具と名同しく物異なり　埄刀 士民切用ニ削去田畔ノ穢艸ニ

蕃名

萬葉代匠記曰布久志ハ金にて爲るのへらなるものにて菜摘女の持ものなり是にてなにをさしきりてとるなり又常にハ布久世といへり 略解ニ布久志ハ保留の約なりほりとるものなるべし

鶴乃嘴（ツルノハシ） 圖本録　鶻觜鋤 歛硯譜

蕃名ビールハアムル

是石匠（イシキリ）の具なれども田器にも用ゆるものと聞ゆれバ

加麻 古事記○和名鈔引方言刈鉤 鎌柄 和名加末豆加 鎌柄

刈小鎌（カリコカマ） 萬葉集　草刈鎌（クサカリカマ） 夏の野乃草刈鎌のかねよわみ又せ良須鎌といふ又鉈鎌あり刈鎌に較れば刃短く厚く草木と代て鉈斧に代ふるなり以て佐

鎌音廉亦作鐮事物紀原鎌三代之田器也○鍛集韻鎌也
鎌○正字通刈禾鎌曰刈鉤亦曰鉊曰鍥詩銍艾朱傳穫禾
短鎌也小爾雅截穎謂之銍 句鎌農政全書 斫稲鍥珠璣藪
○三才圖會刈刀穫麻刀也

蕃名シツケル

加麻とハ刈なり鉤なりと注せり駿河風土記引香具山日記曰天叢雲劔或稱草薙劔草薙亦別名也草ハ着生無主之地此葦原自天孫降臨而後無草叢之神自專輝然焉猶如繁叢逢利鎌拂其草葉故天孫降臨之後有草薙之号又齋部記曰取焼鎌乃敏鎌之義とぞいへりくハしくハ物をよき清め除く鎌の草蕪を刈切の敏功あるに譬えて藤原大織冠の諱を鎌足といひしハ逆臣を退け入鹿を誅して斬給ふこと利鎌の乱穢を掃除ぐごとき功烈を称揚して名を賜られしとかいふ新猿楽歌に鎌の柄乃ちぶけ鎌とそかゝげば若ひ人やさはすゑなとあり○瓊矛拾遺に昔者加冠理髪擇有徳人以鎌剪髪之末今按理髪とハ理髻の謂なり三長記曰承元二年十二月廿五日東宮御元服被理攺御髻云々 東宮ハ順徳の御事也 又類聚雜要抄曰理髪具 案為別雛髪故訓理如字 末額髪二流簪釵子彫櫛二枚本結日蔭鬘と云

云按に本結ハ神祇式に髻髪と書けり従ふべし湏着源弘賢に問ふなり髻結の名をむりけ数ぞ後雁金文七などいふものありとぞ使気となりて毎日河と出すがはぬ猿廻を渡して必本結の所を切まてしより武士と是を学ぶもの出来ていつとなく本結の結ひ目を切るまる事なりまるといふも同て文七ら前付に用ゐし紙本結を文七本結と傳ふなりと

奈多　書紀釤の字を訓り釤字音書東
更傳ゑ見へたり玉篇に大鎌也

奈伎鎌　儀式帳

鍥　音揳或作鍥鎌○農政全書ニ鍥似刀而上彎如鐮而下直其背指厚長尺許柄盈二握以刈草木或斫柴篠或代鐮斧一物兼用農家便之

彎刀　同上

蕃名ハアクメス　亦セイス

奈多ハ薙断也と注せり今図ある所の者柴薪杯斫るによし竹木杯割るにも上端に寸許乃距鉤ありて物杯引取るに便よし されども刃厚く柄太く草莽をハ芟るにかたし是唐山の者と此のかはりあるにや

麻佐加利　書紀

多頭伎　和名鈔即廣刃斧といへり○古事記山多豆註に山多豆是今造木者也八雲御鈔に八杣人也

小斧　延喜式　薪割

鈇鉞　禮記王制

鐇　集韻廣刃斧

小斧子　忘懐録

蕃名

書紀に鐭の質とて薪析しむとあるハ今の小斧なるべし其刃の横なるによりて横切とハいふにや新撰字鏡に斧ハ横刃斧てふもの是なり鈇鉞ハ大斧なり和名鈔工具に斧ハ乎能とあり又斧斤ハ今世に匠斧といへり手斧の名なるにや書紀に鈇鉞賜ふなどと書れしハ漢籍によりて

れさるまて實ハ節刀てふもの也桂金葉集に伊勢の海
とのふる江に朽もてしあのうきへりつれ〴〵思ふ
晋の王質か故事にて伊勢の小野によせてよめり

加ロ慈伎 仲正歌集○蓋荏と謂おもむに用るによりてかとききらかふとそ

加ロ武慈伎 太平記○今俗皮にて作れるを賀武義らいふハ加慈伎の訛也といへり

泥田履

曾利 堀川百首初冰雪ふりにけらしなあらち山こしの旅人そりにのるまで 今津風土記にハ雪車或ハ雪舟と作る又類葉爲廣の歌に乃ちまでのこしや越乃一くしに雪やんのはれるらん曾利に載て家とつゝてわたくしとよめり北國にてハ曾利に乗て雪の上をあゆむとぞ

雪沓

橋 史記○轎字彙與橇同○農政全書橇形如木箕摘行泥上農人欲就泥裂漫撒麥種奈泥深恐没故制木板爲履

檋 漢書或作欙上山踐跣ざるもの
前頭及兩邊皆起如箕綴毛繩前後繫足底板既闊則舉步不陷るの器

凌牀 池北偶談信安滄景之間冬月作小坐牀冰上曳之謂凌牀

秧馬 農政全書以楡棘爲腹欲其滑以楸梧爲背欲其輕腹如小舟昂其首尾背如覆瓦以便兩髀雀躍于泥中繫束藁其首以縛秧日行千畦

薅馬 三才圖會農人薅草之際寘于跨間餘裳斂之於內而上控于腰畔乘之兩股既寬行壠上不礙苗行

番名モッドル・モイル 橇 ラアルス 雪沓 シカアツ 氷上沓

履のごとく殺より渚を履て左足のとのハ右肩へ懸右足のは左肩へかけて歩を進つ泥の上を行き或ハ塊を橇碎き泥をこし濶し或実播の稲種をふりまき所々不同

なり雪車ハ古比須伎古須伎などいふもの皆おなじかるらん太平記にかんじきと謂ざるゆゑ雪中に用ゐる人あら
入よりとなんいへり

稲捋(イナコギ)俗に捋亦扱に作る按に和泉志等または三才圖會の拖杷の字を假て稲捋に充たり然ども圖譜を按に此器と異なる也

寡斃(ヤモメタフシ)俗言後家倒ハ後家泣せ凡古昔稲穂は捋扱(コキスゴキ)の二つの管にはさみて穀を落せしを此物出来てより日に数千斛の穀(モミ)を落て甚便捷を得ければ寡婦孀婆(ヤモメゴケスミ)人に傭はれて稲捋する者の生活(スギハヒ)を失ひ遺秉(ホヒロヒ)の利なきがゆゑに此目ありし

稲管(イナクダ)是大むかし稲扱の器なりし古にいと稀むしろに弊(ツヒエ)ならざれバ今にも捋子と擇ミ落すに此どのにて一扱二扱つゞもあすまじきなり

金管(カナクダ)是ハ古昔の竹管に代て用し也に

いふ

千把捋(コキ)是一日にして揀稲を捋ことの功千把なればこれを称とす

金捋(コギ)　金小(カナコ)

箸(ハシ)　稲櫛(イナクシ)　柄箸(カラハシ)是ハいにしへ篠竹を八三寸許に切て竹の箭のごとくし掌の中にはさみて稲をこぎしときのものなり

稲左良衣　稈把(ワラサラエ)

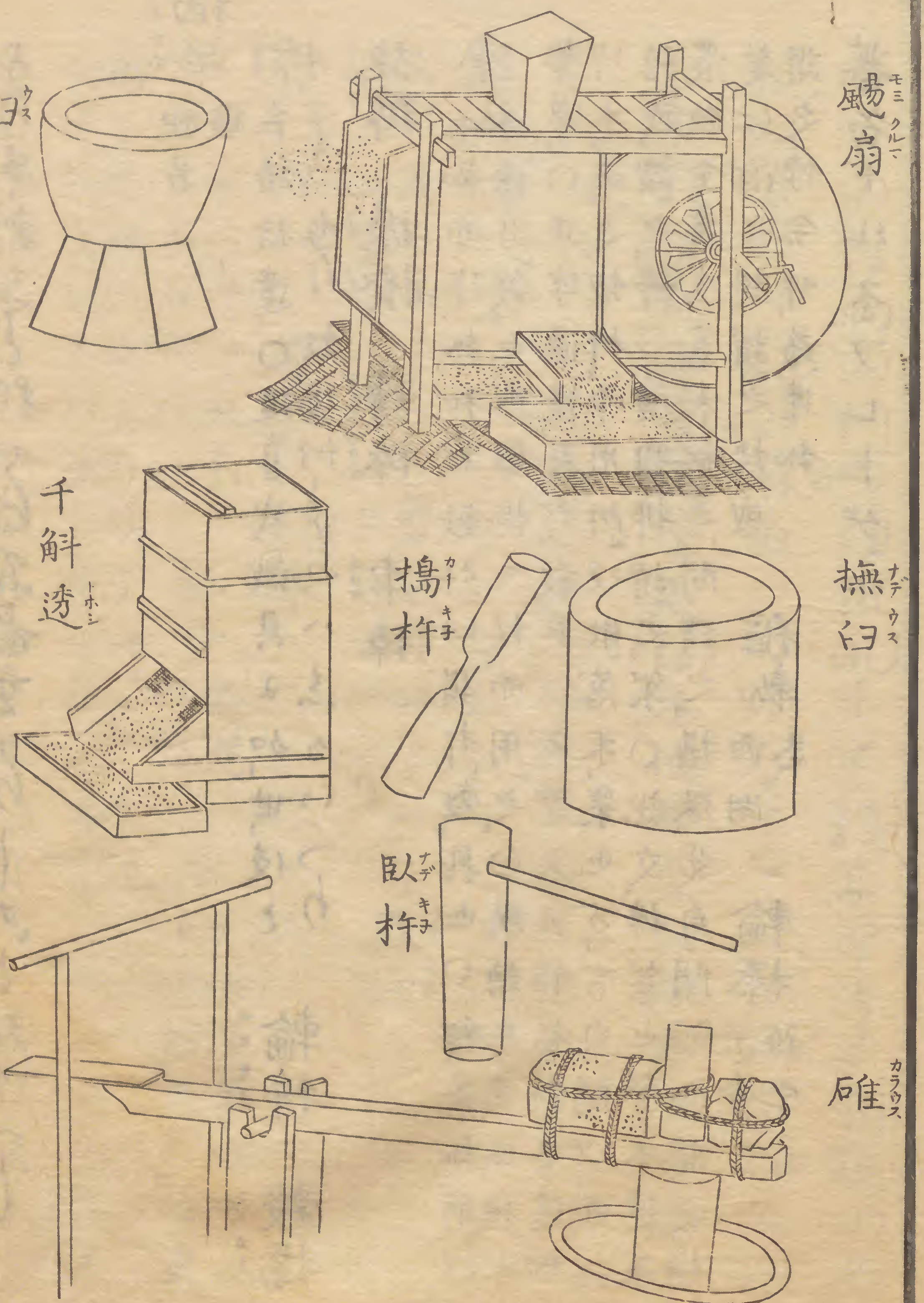
拖杷　農政全書耰麥長把也首列二十餘歯短木柄以批契綖腰曳之○耰麦長把と注せしハ西土陸種がちにて麦ども稲のおとしてはおしなべて田中にて八大なる桶の上に拖杷とらえて稲扱ものといふも穂の極て落やすきがゆゑなり因て彼方の画に稲とも麦のやうに稲扱して打おとんさま書けり

蕃名ヘーケル

和泉志曰拖杷俗呼倒寡(ゴケタフシ)元禄中高石大工邑人始造其製横木為臺長可三尺四脚斜支短前脚高與臺長應仰列扁釘二十歯歯五六寸長投束稲挿入歯縫一扯去稾一日可

斂三十束工大省〇いふ一つは稲掛柄箸などいふもの
まて稲搗ありしとそのもの後ハ稲穰麥稈とかひそろ
ハ門はのこゝにつかひけるこれらの稲搗なるものと絶
えたしよりむかしハ癈まされきあまに氣吹抄に
串刺といふものは上古より稲穂を取みは鶴巣として置
にかけそて穂かけ扱なるか人乃田地かけ犯し束稲を盗ふ
んどせんかはさやうのたよそみそては埒あるざるなき久
志左志てふものと用ゆるゆ賊盗律曰其盗之鐵稲者損
天功之罪也造之者同罪云々鐵稲乃字に著眼すべし云
形掛に似かるものゆゑ久志乃名あり稲かけ田舎乃泪り

束稲などゝ今ハなといふなり摂津風土記曰河邉郡山木
保鐵稲村者　大鷦鷯天皇御宇津直沖名田也木ノ名柏葉
田沖名造田串罪以田贖焉故号鐵稲村　按今の残編風土記断文なし新
古事談赤染法つら我恐ハ思ふ德おもの稲串の葉末
乃露の落るとぞよまりけり是古代盗ひとの串刺の事風なり
末代にいたりて稲扱といふものの作り出やうとして古へ盗
するものゝ如きを求て見せずれども串刺ハ田札なりと
といふ説ありていつまでと稲盗みしものゝ言ふとられ
バなにとてかなるたとへハ比もされど凡禾稲を盗
ものは國に律ありて大辟に准じ落ちらされたといふ


臼 ウス
颺扇 モミクルマ
千斛透 トホシ
搗杵 カチキネ
撫臼 ナデウス
臥杵 ナデキネ
碓 カラウス

稲擳 イナクシ
磨 スリウス
礱 ヨコウス
和蘭氷沓
連枷 カラサホ
箕 ミ
籭 フルヒ
扱把 イナコギ
稲管 イナクダ

より串刺など杷やは用ひ最重くりしたと知るべし

柄竿（カラサホ）和名鈔

梿（カセギ）古語拾遺○延喜式織具に加世伎と
いふあり形相似たれハ志かいへり　輪杵　穀搗

旋轉　振撥　轉棒　車棒

連枷　枷亦作耞和名鈔引切韻打穀具也○釋名枷加也加杖於柄頭以撾
穂出穀也或羅枷三杖而用之○國語耞支耞拂也以
擊草○正字通連耞打穀具一云僉又云桿槌穀具連枷編
竹木為之挜折而用所以斂落米粟也方言自関以西謂之
棓或謂之拂○廣雅拂謂之架○說文拂架也擊禾連架○
農政全書方言宋魏之間謂之攡殊受自関而西謂之檍齊
楚江淮之間謂之扶或　稲耞　西湖志　輪棒　玉堂雜字
謂之持今呼為連枷

蕃名ドルスフレーゲル

此ものは両の竹の頭に孔して横木をとゞく釘鎚のぬき
軸ぬきつく柄の條或ハ破竹などを二つにおり曲げ柄の頂に
つきあげなり三才圖會にはけ木條四莖に生革にて編とぞ

宇須　古事記

竪臼　蓋いふしくハ臼を横臼とい
ふ竪臼ハ横臼に對へいへり　舂臼

幾　書紀即杵なり　幾祢　打木

臼　黄帝内傳帝既斬蚩尤因叔杵臼　梱子　義楚六帖　后臼　後漢書○今石臼梓あり以藥を
搗く是碓の術あり後に碌々　杵　同上
執泥の事を石臼藝と呼つり

蕃名ヘイスル　臼　スタムプル　杵　亦スタムプストック

以上搗臼
臥杵之類

スタムプブロク　撫臼

宇須ハ打筩の義或謂宇ハ搗なり須ハ磨なりと一名に両物あり猶今磨搗といふがごとし又上長くて棱て中稍細く杵ハ直にして両端太きを搗臼搗杵と云　字林直舂曰搗即杵臼　に又長くして筒のごとく長き槌は上の方細きものを撫臼撫杵と云　楊升菴集臥杵 即手杵なり　貞観儀式に臼にハ其腰杵にハ其枚とあり○越風磑歌曰野人傳云人或有務於耕稼者早且往田執杵以為耒耕田三畝餘手足疲倦將休息揆之乃杵也驚愕怪之再耕之不能復耕也其初為耒操心專一力行不疑是以杵為耒之用既知非耒則杵亦不能為耒也何則心為之主也誠於此者刑於彼也石猶飲羽況於人乎

陶臼　貞観儀式

按是焼物の臼なりや延喜神祇式に數所載あり焼物にてハ米つくべくも見えざれど祠具の米ハ古へ精げざるがゆゑともいへり又室町日記に朝鮮まで汲米を渡されけれど其家にはいねど臼杵なくて如何せんとおもふ所に夫是山林に行て木の枝どもを伐採して杵にして扨いかにも空き地を掘て莚を押込て臼にしてつきけれバ言語道断にあつらへむきにて易繫辭に堯舜氏斷木為杵掘地為臼蓋其始ハ天然にしてあつらへ

がきまなり

柄臼（カラウス）萬葉集○即碓也

踏臼（フミウス）畿内以西の方名なり東國の鄙にて地柄臼といふ

柄臼壺（カラウスツボ）郷談正音に碓圏 亦碓挨ともいふ

横嘴（ヨコカミ）とも云郷談正音に

碓欄亦碓校とも云

柄臼杵（カラウスキネ）なり即碓嘴

保呂志 和名鈔引廣韻桯碓桯也 俗言棹なり正字通に碓

保呂々木（ホロロキ）俗或

衛一名 鳥木（トリキ）碓の前に取附所とまる木なり形鳥居に似たり

八抵

碓 品字箋碓舂具木杵上之石嘴也○兼名苑碓一名碻又曰碓臼臼所以受米碓其舂也此石をとく杵とするを

押石嘴と作るハ秋葵の種を水に浸しその汁を用て杵の端を石にて継ぎてあるなり秋葵の根汁よく石を継べし

蕃名タラブ・ヘイセル

此ものハ礱磨と殊にして米を精鑿に用ゆる所なり万葉のかるうすハ田廬のもとに吾兄子ハにふぶに笑て、立ませる見ゆとあるを契沖ハ軽碓ならんといへるもやかるうすハ田廬の下にまゐてとが兄子かふこく笑て立ませりからうすとよむやからうすハ踏に労なく軽けれバにふてにまじもハいふなる歌し○四季物語六月に梢の蝉のなくかしがましと枕くこゝうるさくれどすまにハつゝへのごとくとふるからうすの音さハやうからうすの桓子新論に云伏羲制杵臼之利後世加巧借身践碓而利十倍碓にて舂バ米砕耗ざる也

横臼ハ古事記典、久須と読め
臼ハ古字の反久なり　唐臼の
磨臼和名鈔又須留　久留返伎毛乃　子　枕艸　田臼　字に近
須と読めり
ハ是か　穀磨臼和爾雅
らん
礱音龍世本所以破穀出米也○三才圖會自山而東謂之
礱編竹作圍内貯泥土状如小磨仍以竹木排為密齒方
謂之木礱石鑿者謂之石　篭稲　世本　木礱　木磨　穀托
木礱○爭名苑礱一名磚
礱以上類書纂要　土礱幼學須知　挨粟　礱稲子　檜櫑子　推礱
子以上郷談正音
蕃名コールンモール
此もの臼田家にて穀を磨て米となす具にして木臼竹臼
等乃製あり田家乃要器なるゆゑに田臼と呼びて代近

記にくるへきものハ今のもちうるものにも事
をや臼の字と同のくるめくと云に用ひる物なれ
ば俗にくるくるとくるめくきと云詞もこの理よりなれ
ふりてまろふ意を表すべし○竹臼ハ米粒を取るに
ちる一歳年に八壇を易竹をしばしばざれバ壊やすきゆゑ今
多く木臼を用ふきれど古人の製に倣ふまれなれ
臼乃眼　天工開物
臼乃眼ニ磨眼　引木亦引手とも云　輟耕録ニ木肘
阿通宇須和名鈔
引臼
石臼和爾雅○越風礱歌訓曰越俗之所傳石臼肩
粟偶而挽之之歌也男女説以忘勞粉末食之

麥臼ヨ麥を引碎て粉にもちゐるなり

磨 說文石磑也蓋古の磑ハ或木にてもつくれり

碾磑 唐律碾磑ハ磨上轉石也磑ハ磨下定石也 磨子

品字箋 石碾 五雜組

上臼ヨ即碾也○三才圖會上臼塡磨曰硐是なり

下臼ヨ即磑也同上磨臼床曰摘是なり

保曾 即臍 同上

なり○同上 引木 同上轉磨曰幹

宇須承 同上承磨曰槃

主磨曰臍 臼乃眼 同上

注磨曰眼

蕃名ステーンモール 磨

天智紀に高麗の曇徴碾磑を製とあれど書紀集解引景行紀大碓小碓二皇子之名義曰大碓ハ即碾也小碓ハ即磑也とあるをもて宜なる哉これ必曇徴に始るにはあらじ

此もの石もて作り全鼓を圓して其質本石の別と大小の異なるのミ同じ名を立るにめづらし蓋杵臼の制変して巧便を加へて柄臼を作り又遂に水柄臼の設あり其臼碓をもてば其用事おのづから殊なり臼臼曰碓曰磨曰磑乃着方言稍異にて古今或ハ混るゝよりあるに煩を惮りていさゝか圖書せり

美 古事記○即箕也

箕乃舌 本艸箕脣正音に簸箕邊といへり

箕 音姬篇海箕揚米去糠之具方言陳宋楚之間謂之籮○凡箕の古文十餘字字典にみえたり

蕃名ワン

通證引卜氏說曰箕者以去皮殼留子實故訓爲實○此を
の和泉上村のものを名品とし所謂和泉箕なり米を揚
げ糠を去を簸といふ莊子に播糠眯目と讀るあり今
言ふはなり朱子註綺に箕にてふるふと播弄するとあ
り○曲禮に箕除塵埃之器と註せし八国音塵取といふ
はなのにて形箕のごとく板にて作りたるなり軍陣にても
用ひ塵取に類し小を負戰死等を載ねしものにて今の
通襲しといふに相似たるなり

布流比 和名鈔

世伊籠　米透る西州にて多く此器とい
ふ東国にては篩に用ゆ

絹篩 即天工開物同名なり

籭 音漸或作簁篩和名鈔引說文篩除麤去細之竹器也　米篩

蕃名セーフ

籭は新撰字鏡に豆支布留布と訓し又曰籭ハ斅也比曽
曾留とあり今にも箕にて糠を去るを簸ると云ふ
人もありかくのごときの詞あり○籭とふは大小あり
凡そ眼の粗きハ透といひ密なるを布流比といふなり東
雅に布流とは振也手を動かして用ふならば名づけしなり

鉤籠

篩穀箉 三才圖會

蕃名ハングセーフ

麤管 延喜鎮竈祭式於官齋院舂稲簸以麤管炊以韓竈

簸車 多識編

通箕

颺扇 三才圖會○集韻颺風飛也揚穀器其制中置簸軸刻穿四扇或六扇又謂之扇車

扇米風車

風扇車 圖繪宗彜

天工開物

風櫃 玉堂雜字

蕃名ワンモール

式の舂稲とあるハ是籾搗まて之を簸とは稃を遂し歟

なる屏箕とハ麤篭のごとく毛眼の麤篩なるをさしてこの箕といへるにハ今乃籾車乃製のごときもなれるに倣ひて作り出せしなるべし後の千斛簁てふものも本ハ屏箕の変製に出たるなりと通箕とおなじ農夫ハ幡通風なとの吹通しを殊小磨穀搗穀乃類は筵の上におひて竹箕或量になどより吹あたるをば稃糠ハ飛散て米は筵乃上に下留るを俗に登保志といふ扇車をも登保志美といひふるきは志を省て登遠美といふ唐箕などと書は非字なり登と多と通音

穀篩（セミフルヒ）多識編

多天流（たてふるひ）和漢三才圖會○今多く箕及桶を用ゐ風に向ひ之をふるひて粃糠を去るといへり

登保志（とほし）篩籭亦名と同くきてき用ひられバ今も己

颺籃 三才圖會ニ形如箕而小前有木舌後有竹柄禾穗糠粃相雜執此操而向風擲之乃得淨穀不待車扇又勝箕

簸（ヒルミ）邊箕 全浙兵制

蕃名

千斛簁（センコクトホシ）和漢三才圖會

萬斛簁（マンコクトホシ）但此らの千斛遠よりも功多きをかふるものの目あり

蕃名ハルブ

此らの新製なり底なき大箱二を重ね置き上級の箱中によりたより右さ每斜に板を嵌めて下級の箱中に左よりたさ波銅網を嵌め此網究緻密にして上より米糠のいまだ篩ざるもの此板ひるに先つ上級の板を右よりきたらしめ次に下の網を左よりきたらしめ糠は網より脱漏し米は漏れずして前に出るを別器に受盛るなり之此籭に比ぶれば力をいたさずして目に蕃米の粃糠をきらふこと千万石をも以て較ふべし然に此俗用何ぞ或謂是風車なり

成形圖説卷之十三終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan